

〈知的・情緒障害教育〉

## 作業学習における働く上で必要な作業能力を高める指導の工夫 ——作業工程の課題分析と作業評価の工夫改善を通して——

沖縄県立大平特別支援学校教諭 東 江 仁 美

### I テーマ設定の理由

平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領及び特別支援学校高等部学習指導要領改訂の総則において、「自立と社会参加に向けた職業教育」の充実が提示された。特に「高等部の専門教科については、社会の変化や時代の進展、近年の障害者就労状況を踏まえ必要な見直しを行う」や「職業に関する教科については、現場実習等の体験的な学習を一層重視すること、地域や産業界との連携を図り、企業関係者などの外部の専門家を積極的に活用することを明確にする」等が示されている。

沖縄県立大平特別支援学校（以下、「本校」とする。）においても、学校教育目標に「児童生徒が障害等による学習上又は生活上の困難を克服し、自立を図るために必要な知識・技能・態度を身につけさせ、自立し社会参加できる人間を育成する」を掲げ、進路学習等に力をいれ、個々の実態に応じた進路選択ができるよう、作業学習では様々な取り組みを行ってきた。平成19年度までは一般学級の中に、高い生活力や適応力を持ち、企業就労が可能な生徒と、支援を受け社会参加を目指す福祉就労の生徒が混在していた。そのため働く上で必要な基礎的・基本的な能力を高めるための指導ができる反面、企業等が求めている厳しきや適応力の指導に関しては踏み込んだ指導が十分に行えなかった。そこで、主体的に社会参加できる力の育成をめざし可能な限り職業自立を図る観点から「作業学習」を中心に、社会に適応しながら生活していく体力と能力の育成をめざした教育実践を行うことを基本として、個々の生徒の状態や特性等に応じた教育課程を編成した。勤労意欲の高揚と勤労生活への適応を目指すⅠ・Ⅱ類型、基本的な生活習慣を身につけるためのⅢ類型を、弾力的に編成し、時間割においても、月曜日から金曜日までの2校時から3校時の帯状で位置づけている。本校作業学習の目標は「卒業後の社会参加の内容を選定し、必要な知識、技能、態度を身につけると共に勤労に慣れ、達成感を感じながら働く意欲を育てる。」ことを目指し、Ⅰ類型に卒業後の一般就労、就労移行に向け取り組む清掃班、就労移行や福祉就労を目指す従来の木工班・家庭班・農園芸班・窯業班・紙工芸班をⅡ類型として設定している。また、自立活動が必要とされる生徒はⅢ類型として設定し、個別の指導等にも取り組んでいる。

研究の対象である生徒（男子3人）は、昨年Ⅰ類型の清掃班での作業学習に取り組み、清掃と11月から取り組む接客業の内容で、就労に向け指導を行ってきた。3人の作業や就労に関する実態は、作業遂行能力、コミュニケーションの課題と様々ではあるが共通して挙げられる課題として、産業現場等における実習の評価簿等から、「報告・連絡・相談が足りない」が挙げられた。特に「報告」に関しては、「作業に集中し過ぎるあまり報告するのを忘れ、先に進めてしまい再度手直しがある」、「まじめに取り組んだが声が小さいので聞こえにくい」、「どのタイミングで報告していいか戸惑った様子」等が企業（事務所）からあがった。その要因として生徒たちは、作業のどこで報告をしたらいいかわからず困ってしまっている。ほうきやモップで清掃は終わりであろうという自己の考えで進めてしまったのではないかと考えられる。つまり、作業のどの段階において報告を行えば良いのか、相談するタイミングはどの時点なのかが理解できなかったのではないかと推察される。

また、清掃後に作業遂行力等のチェックを行うが、各々の評価基準でチェックを行うこと、評価を行う際にも自己評価となっているため厳しく評価することが難しく、再度手直しになるケースやチェック項目数の増加につながっていた。これは、これまで共通した評価基準が設定されておらず、教師や生徒の各自の評価基準で行ってきたこと、方法においても、自己評価のみで行っていたため、甘い評価になってしまったことが考えられる。これらのことから、共通した評価基準にて評価を行い、次の作業に活かしていきけるような工夫が作業学習には求められていると示唆される。

そこで本研究では作業手順の分析を行い、手順の中に報告や相談をする場面の設定を行う。また、一人で作業ができるようにするため、作業のつまずきの箇所に応じ、課題分析を通して確認をする。さらに、チェック項目について生徒たちがわかりやすい評価基準を設定し、相互評価を行う等評価の仕組みを改善

することで、手直しが少なくなるのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

- 1 作業学習において、作業内容の課題分析を行い、できる状況を作ることによって、働く上で必要な作業能力である「報告・連絡・相談」が改善できるであろう。
- 2 生徒のわかりやすい評価基準の設定や、評価の方法を工夫することで、生徒自らが作業態度や作業遂行力を意識し、取り組むことができるであろう。

## II 研究内容

### 1 作業学習について

#### (1) 作業学習の変遷

作業学習は「手に職をつけ」卒業後「食べていける人間」の育成が優先され、「職業教育」の名の下で発足した。その後、高度経済成長とともに、教育も変化し、作業学習のねらいも、「全人的発達」「自己実現」という「人間らしく生きられること」に重点がおかれた。さらに、障害のある子どもの重度、重複化とともに、作業学習のねらいは生徒の実態に即し、職業生活および家庭生活に必要な基礎的、基本的知識、技能を身につけさせること。また、勤労を重んずる態度を養い、進んで社会生活に参加していく能力を培うことに重点が置かれた。

近年では、平成 21 年 3 月に告示された高等部学習指導要領において、就業体験等職業教育では「地域や産業界等の人々の協力を積極的に得よう配慮するもの」と規定された。本校においても社団法人沖縄県ビルメンテナンス協会の協力により、清掃用具の寄贈や校内研修等で多大な支援を受けている。今年度は、第 11 回沖縄県ビルクリーニング技能競技大会において、生徒たちが技能競技の合間に清掃実演の参加を行った。このように、清掃のプロから直接講習を受け、生徒の作業学習への実践に活かすことができるようになってきた。

#### (2) 作業学習の教育課程での位置づけ

本校高等部は、本校教育の最終段階であることを踏まえ、主体的に社会参加できる力の育成をめざし可能な限り職業自立を図るという観点から「作業学習」を中心に、社会に適応しながら生活していく体力と能力の育成を目指した教育実践を行うことを基本としている。また、主たる障害が知的障害であることから、その特性である自分自身の認知行動を把握することができるメタ認知能力の低さから、図 1 に示した教育課程の再編成を行っている。中でも、作業学習等領域・教科を合わせた指導は、身体活動や物を作る総合的な活動や具体的で実際の活動を行い、一人一人に適切な役割を持たせ、達成感を味わうのに有効な指導形態となっている。

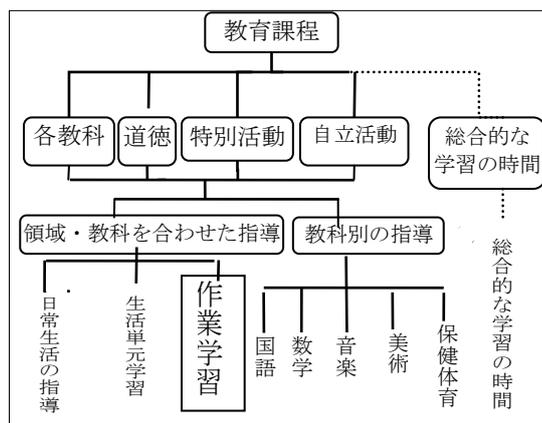


図 1 高等部の教育課程の構造 (I・II 類型)

#### (3) 本校における作業班の編成

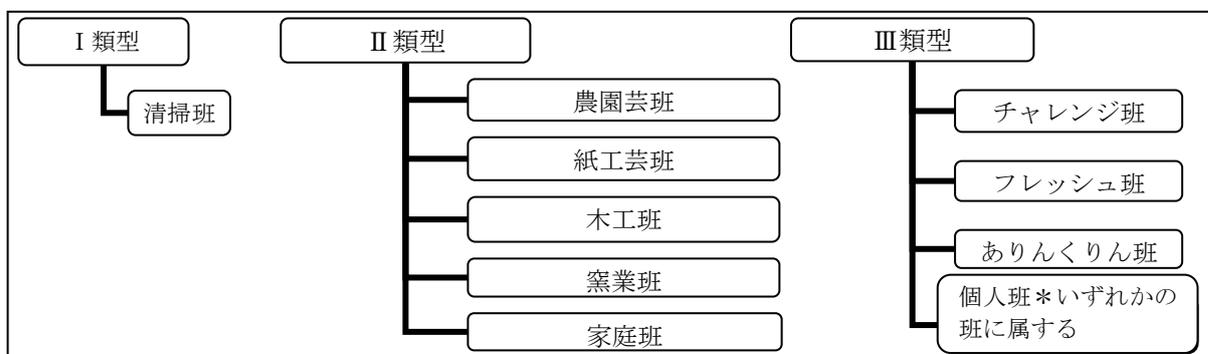


図 2 各類型の作業班

図 2 は高等部における類型別に編成された作業班である。まず、将来の進路を企業就職、福祉就労、生活自立訓練・介護の 3 つに分類して編成を行っている。これは卒業後を見据えた生徒の教育的ニーズに合わせた編成を目指し分類を行ったものである。これまでの作業班は、高い生活力や適

応力を持ち、企業就労が可能な生徒と、支援を受け社会参加を目指す福祉就労の生徒が混在していた。そのため、福祉就労を目指す重複学級等の生徒に時間をかけることが多かった。その反面、高い能力の生徒には、踏み込んだ指導が難しく企業等から求められる厳しさや適応力の面で十分な指導ができなかった。また、重複学級の生徒にとっては、一般学級の生徒中心で作業が行われるため、生徒の実態に合った作業内容の設定が難しく、成就感や達成感の共感が得られにくい状況であった。この状況を改善するため高等部では、教育課程に類型（学習グループ）を設け、勤労意欲の高揚と勤労生活への適応を目指すⅠ・Ⅱ類型と基本的な生活習慣を身につけるためのⅢ類型で分類を行った。また、Ⅰ類型は企業をモデルとした清掃班を、Ⅱ類型は福祉就労先をモデルとした従来の作業班に編成された。

## 2 課題分析 (Task Analysis) について

課題分析とは「教えようとする行動を具体的に決める方法、スモールステップの指導を行うために必要な作業」であると田中清章(2007)は述べ、課題分析から子どもの行動を観察すると「何ができているのか（できていないのか）、何を教えなくてはいけないのか（教えなくていいもの）が明確になる。できない行動は分析すればするほど、指導方法を導き出すヒントになる。」ということがわかっていくという。

また、名執宗彦(1999)は、課題分析を使った工程表を活用することで次のような効果が期待されると述べている。

- (1) 作業学習を指導するすべての教師に、作業内容の全容や、つまずきが予想される作業工程等について事前に共通理解が図れる。
- (2) 個別の生徒ごとに、もっとも適切な作業方法の詳細（例：手の動かし方）や、指示の出し方（例：指示に使う単語）等が記載された部分を各指導者にコピーして配付することにより、複数の指導者の間で、個別の配慮と指導の一貫性が図れる。
- (3) つまずきが出たときに、作業工程表にある基本動作と対照することにより、その原因と対応策を早期に見いだすことができる。
- (4) 実際の作業を通して、つまずきが出やすかった作業工程や、そのときに工夫して有効だった指導内容について、蓄積が図れる。

以上のことから、生徒のつまずきを課題分析の項目から見つけることで、どの項目から丁寧に指導したらいいのか把握でき、共通理解が図れるのである。つまり、生徒が意欲的に作業活動を行うためには、個々に応じた作業工程を分析する必要がある。それにより、工程表を覚えている生徒にとっては、課題分析の項目を減らしていくことも可能となる。課題分析の項目数の減少により生徒の自信につながることも考えられる。

表1は、トイレ清掃の簡単な課題分析である。課題分析を作成する際は、事前に教師自らが作業観察、体験等が重要である。教師が従業員の仕事のやり方を観察し、指示書やマニュアルを参考にするという「見る」ことを行う。そして、従業員から手順の工夫やコツ等を聞き取り、見ることを補う。今度は教師で実際に清掃をやってみて、難易度や力加減、疲労等を把握する。最後にその過程を時系列にすべて書き出していく。書き出す場合、簡潔な言葉で、表現は具体的に物や動作に名前をつけることが大事である。初めて清掃を試みる生徒でも、清掃用具名や清掃箇所を知っていれば、ある程度一人でトイレ清掃ができると考えられる。それでも難しい場合は、さらに細かく書き出す必要がある。課題分析に評価基準を設け、点数を「0：支援なし、1：言語指示（話し言葉で指示することを意味する）、2：指さし（物や方向を指さすことで、次の仕事の手がかりを示す）、3：モデルの提示（仕事の方法を見せることでモデリングとも使っている）、4：身体介助（直接体に触れて、体や手の動き・力加減等を教えること）」とする。点数の合計が大きくなるほど支援が必要な所となり、点数が高い項目の指示書あるいは手順表を使用するこ

表1 トイレ清掃の課題分析

	内容	1回目	2回目	3回目
1	窓をあける。(換気をする)	1	0	0
15	スクイージーで、泡をきる。(泡はいすいこうに流す)	3	2	1
16	スプレー(消毒液)を洗面台・小便器・大便器・ドア・かべ・に、シュットする。タオルでふく(水分を残さない)	2	2	1
17	消毒液をすてる。	1	0	0
18	モップしぼり器とモップを洗って、かたづけ。	1	1	0
19	トイレレットペーパーを、セットする。	3	2	0
20	スリッパ・ゴミばこを元にもどす。	1	0	0
	合計	15	10	6
0：支援なし、1：言語指示、2：指さし、3：モデルの提示 4：身体介助				

とで、最小限の介入で指導ができる。

本研究では、課題となっている「報告・連絡・相談」の中で特に「報告」に焦点をあて、課題分析表の中に取り入れることで、定着することができないか、自己の考えですすめることも改善ができるのではないかと考え作業手順表に「報告をする」の欄を設定した。

### 3 働くために必要な能力について

滝澤かほる(2006)らによると、「働くための基本的な力とは、①決まりを守り、意欲的に働くことができる。②自分の仕事を最後までやり遂げることができる。③正確に仕事を行うことができる。④適切な速度で仕事を行うことができる。」の4項目を挙げている。また、「働くための技能とは、①身体機能を活用したり、道具を使ったりすることができる。②製品の良否を判断することができる。③数を数えたり、電卓を使って計算したりすることができる。④文字や記号を読んだり、書いたりすることができる。⑤時計を見て、時間を判断することができる。」の5項目を挙げている。

一方、本校進路指導部から出されている「作業学習評価表」の項目では、「働く場における行動・態度」として、次の20項目をあげている。「身だしなみ・時間・ルール・理解力・積極性・責任感・安全危険の対処・巧緻性・持続力・正確性・作業意欲・体力・挨拶返事・報告連絡相談・会話・言葉使い・指示を受ける態度・現場コミュニケーション・現場速度・現場準備片づけ」が働くための態度のキーワードであるとしている。その際の評価は3段階(A・B・C)で示されており、A評価であれば作業意欲が強い、作業の報告ができる、積極的に作業に取り組む、決まった時間の勤務ができる、挨拶返事ができる、慣れるに従い作業能力が向上した、指示内容を理解できる、ミスなくできる、危険に対処できる言葉使いが丁寧である、作業に耐えるだけの体力がある、職場のルールを理解している等にチェックがされ、企業での就労が可能であると判断される。

さらに、松矢勝宏(1999)は、「企業が知的障害者を受け入れようとするとき、第一に重視する能力や技能は必ずしも専門的な職業能力や技能ではなく、身だしなみ等の身辺自立、あいさつや返事ができる等の好ましい生活態度、働く意欲、作業の持続性や持久力、間違えず着実に仕事を完成する労働習慣や目標を達成しようとする責任感であり、働く生活に必要な一般的で基本的な能力や技能である。」と提言している。

本研究の対象生徒は本人が持っている力として、時間を理解し指示をされると報告することはできる。その反面、働くための力は持っているが、意識付けが足りず時間内に終えることができない。指示を受けるまで報告をしないことが課題として挙げられている。そこで、本研究では、働くために必要な能力として挙げられている中から、課題となっている「報告」と着実に仕事をこなすこと(正確性)の意識づけを取り上げ、検証をしていくこととした。

### 4 作業学習の評価について

滝澤かほる(2006)らは作業学習の評価では、「長期目標と短期目標を設定し、長期目標には①個別の教育支援計画から生徒の目指す目標を設定する、②前年度末の評価と産業現場等における実習での評価等を参考に設定することであるとした。また、短期目標は、長期目標の達成に適した作業工程を、具体的な目標を設定することである。その評価方法では生徒の具体的な学習活動を決め、評価基準を設定し、作業量や時間だけでなく、『丁寧さ』『正確さ』も測定し記録方法を工夫することである。例えば、生徒の作業の質や量を数値やグラフで示したデータを使い、その変化から生徒の学習を評価する方法が有効である」と述べている。つまり、毎回記録した作業の回数や時間等を数値化し表示することで、その変容を生徒が理解し、称賛を受けることで、働く態度の育成につながることができるとされている。

一方、泉裕志(2005)は作業学習の評価を自己目標に向けた評価と考え、「自分自身で目標をもつこと、そのことを自分も振り返るとともに、周りの人と一緒に考えていくことが大切である」と述べている。このことから、生徒の個別の教育支援計画や個別の指導計画から目標を確認することも重要であると考える。さらに、「自分自身のことを知るとともに、どのような自分も肯定的に受け止め、前向きに生きるために大切なことは、『こうなりたい』『こうしたい』という本人の思いや願い、つまり、自分で立てた目標である。」と述べている。そのために、これまでの評価の考え方を以下のように改善した。

- (1) 目標は生徒が自分で立てる。
- (2) 教師は、生徒の立てた目標に対して評価をする。
- (3) 評価は周りの人と一緒に考えていく。

これらを参考に、本研究では、生徒自ら目標の設定を行い、項目ごとに評価をすることとした。その

際の評価は共通確認した基準を用いた（◎：がんばった，20ポイント ○：ふつう，10ポイント △：もう少し，5ポイント）。

さらに，生徒同士が相互評価することにより，チェックの箇所，評価基準等の確認につながり，作業への態度の改善につながるのではないかと考えた。また，自己の課題を生徒自らが理解し，次の目標設定につながるのではないかと考えた。そして，協力する態度につながるのではないかと考え，設定を行った。

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 対象生徒のアセスメント

(1) 産業現場等における実習評価から見える対象生徒の実態について

表2は，産業現場等における実習の評価である。その中から課題として，挙げられた項目を示した。

表2 実習先の評価表

項目	対象生徒 a	対象生徒 b	対象生徒 c
協調性	声かけより協力できる。	<b>自分勝手な行動がみられる。</b>	声かけより協力できる。
休憩の過ごし方	他の人と一緒に過ごせる。	他の人と一緒に過ごせる。	<b>指導員がいれば他の人と一緒に過ごせる。</b>
挨拶・返事・報告	自分からきちんとする。	<b>声かけをすると応答する</b>	自分からきちんとする。
指示を受ける態度	すぐ指示を受けられる。	<b>指示を必要とする，指示を聞こうとしないことがある。</b>	すぐ指示を受けられる。
コミュニケーション	<b>指導員が入れば他の人と関われる。</b>	誰とでも仲良くできる。	<b>指導員が入れば他の人と関われる。</b>
実習先からの評価	・コミュニケーションの取り方に支援が必要。 ・指示をもらうまでに時間がかかった。	・マイペースで作業を進めることがあった。 ・注意することに言い訳を言うことがあった。	・照れ屋な性格で，挨拶・報告等がよりできるようになればよい。
課題（改善すべきこと）	・状況説明が苦手であることから自分から聞くことが難しい。	・都合が悪くなると黙ることがある。 ・声をかけるまで報告をしないことがある。	・慣れた場所でないとなんか関わりが難しい。意思表示がはっきりしない。

(2) S-M 社会生活能力検査の結果

S-M 社会生活能力検査図3～図5は，結果である。本生徒 a は社会生活年齢が12歳9カ月であるが，発達に偏りが見られた。特に「作業」や「意志交換」に落ち込みがあることから，作業への促しの必要性や自分の考えを相手に伝えることが苦手であると考えられる。本生徒 b の社会生活年齢は12歳0カ月であるが本生徒 a と同様に「作業」や「意志交換」に落ち込みがみられる。本生徒 c の社会生活年齢は9歳7カ月であり発達の程度に偏りが見られた。「集団参加」が極端に低く，その次に「意志交換」「作業」に落ち込みがみられた。3人共「意志交換」に課題があることから話し合う，やりとりをする，伝言することが特に難しいと推察される。

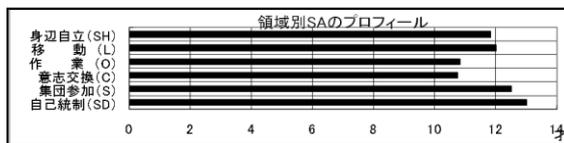


図3 S-M 社会生活能力検査の結果（対象生 a）

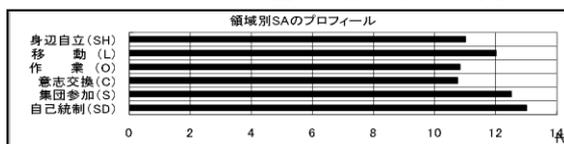


図4 S-M 社会生活能力検査の結果（対象生 b）

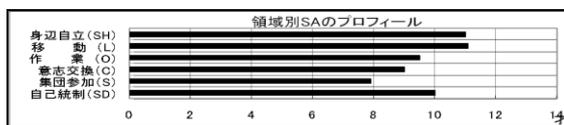


図5 S-M 社会生活能力検査の結果（対象生 c）

#### 2 働くための能力を育てる工夫

3人の実態から得られた課題の改善に向けて，作業手順の内容に「報告」を取り入れるための課題分析を活用した作業手順表の作成を行った。また，評価を見える形としての工夫（マグネットの活用・ポイント表）を行った。特に，手順表は，生徒の理解できる形でスモールステップ化し，漢字の読めない生徒には，ひらがなで作成し一人でできる状況をつくった。

(1) 課題分析を活用した作業手順表

表3は「多目的ホールの清掃工程表」の一部である。生徒がどのタイミングで相談してよいかの手だての一つとして，手順表に報告をする場面の設定を行った。また，「そうじはグループでおこなうので，分担して仲間と協力しておこないましょう。なにかこまったことがあったら，上司に相談しましょう。」を追加し，相談ができる状況づくりを行った。また，時間を意識する必要があるため，項目の2・3箇所に時計の写真を添付し，その時間内で作業が進行できるような意識付けがもてるような工夫を行

った。

表3 多目的ホールの清掃工程

終わったら、OK マグネットを数字の上に貼る。	報告をしたら色マグネットを教師が貼る。	時間を確認する工夫
7 「ほうきが 終わりましたので モップをします」と 上司に 報告をする。	14 「多目的ホールの そうじが 終わりましたので チェックを お 願いします」と上司に 報告する。	
15 手直しが 終わったら 担当者カードを 入り口に さげる。 ドアの カギを しめる。		

(2) マグネットを使って見える工夫

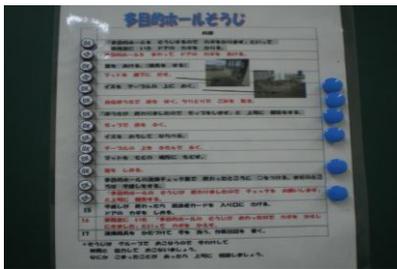


図6 清掃工程

図6は、多目的ホールそうじの手順表である。表3の手順表の全体像で、左右にマグネットを貼ったものである。手順表は対象生徒3人の分を用意し、番号順に清掃が終わったら、OKと書かれたマグネットを貼り、生徒がどこまで作業ができたのかを確認できるようにした。また、報告ができたことを自己評価するために、色マグネットを活用し、何ポイントを獲得したかはっきり見えるよう工夫した。

(3) チェック表を使って生徒がわかる評価の工夫

① 評価基準の設定

表4は、清掃がきれいにできたか、報告等ができたかをチェックするために作成した表である。一通り清掃を終えると「掃除をやった」「終わった」という自己満足になりやすい。しかし、教師が清掃箇所をチェックするとゴミが残っていて再度手直しが入ることがある。そこで、授業担当者と話し合い共通理解を図り、生徒がわかりやすい基準を設定することにした。例えば、ゴミが0から1箇所残っていれば◎、2から3箇所が残れば○と基準を決めれば、生徒が項目に従って記録し評価がしやすくなるであろう。そして、生徒が評価を行った後、教師はそれを参考にし、生徒の作業評価へとつなげることができる。

きれいに清掃を行わないといけないという責任感と正確さを考える。同時にわかりやすい評価基準を設け、生徒たちが一人で確認しチェックができるよう工夫することで作業終了まで教師の支援なしで生徒同士で評価が行えるよう工夫した。

② 相互評価について

清掃終了後に、清掃区域のゴミの掃き残しやシミの拭き残し等がないかどうか自分でチェックをするが、自己の評価が甘く時間内に終わることができない場合がある。作業の正確さや時間のけじめに課題が残る。その改善として、正確さや時間を意識できるようグループ清掃では、相互評価を実施することで、作業スピードや作業の正確性を考えることができるのではないかと考えた。

表4 清掃チェック表

しょくいんしつ せいそう	あいて		なお	
職員室の清掃チェック表(相手ができていたら○をつけましょう。できていないところは、やり直しましょう。)				
項目 日付	ほうき(ゴミは残っていないか)	モップふき(シミの拭き残しはないか)	せんめんたい(水の拭き残しはないか)	ほうこく・れんらく・そうだんができた
き	ゴミ0~1:◎	シミ0~1:◎	みず0~1:◎	ほう・れん・そうができた
じ	ゴミ2~3:○	シミ2~3:○	みず2~3:○	2回・・・◎
ゆ	ゴミ4つからたくさん	シミ4つからたくさん	みず4つからたくさん	1回・・・○
ん	ん・・・△	ん・・・△	ん・・・△	0回・・・△

### 3 授業の実際

昨年度から週に1回程度設定している多目的ホールの清掃に焦点をあて、課題分析を行い、個々の生徒が一人でできる状況づくりと、「報告をする」という項目を付け加え、働くための態度の育成につなげることにした。また、作業評価を生徒が理解できる評価基準の提示を行うことで、教師の支援を減らし、自分たちで行えるよう工夫することと、評価の採点を自分で決めることで作業に対する責任感にもつながるのではないかと考える。そして、他の清掃箇所でも多目的ホールの清掃と同様の課題分析を活用し、職員室・トイレの手順表を作成した。図7は2回の検証授業で行った授業実践の一部である。

流れ (分)	生徒の活動と教師の働きかけ		評価の観点
導入 (10)	はじめのミーティング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身だしなみを整える。</li> <li>・今日の個人目標を発表する。</li> <li>・用具置き場で各自の用具を取って、自分の清掃担当場所へ移動する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の目標がわかる。</li> </ul>
展開 (75)	清掃活動	多目的ホール清掃 <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の説明を聞き、わからないことは質問する。</li> <li>・自分の作業工程表で確認し、進んで作業に取り掛かる。</li> <li>・適切な声の大きさで報告をする。</li> <li>・作業が終わったら工程表の番号にOKシールを貼る。</li> <li>・報告ができたなら教師が色マグネットを貼る。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・報告・連絡・相談ができる。</li> <li>・適切な声の大きさと報告ができる。</li> <li>・作業が終わったら工程表の番号にOKシールを貼ることができる。</li> </ul>
	作業終了の確認	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・多目的ホール清掃をチェックする。</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・職員室清掃をチェック表を使って点検をする。</li> <li>・相互評価を行う。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・多目的ホール・職員室・男子トイレを相互評価し、チェック表を出し合い確認することができる。</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象生徒bが対象生徒aの清掃した男子トイレをチェックをしているところ。</li> </ul>
まとめ (15)	終了	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価をする。</li> <li>・良かった点・努力点を報告し、ポイント表にシールを貼る。</li> <li>・ポイント表を枠で囲みどのくらいで目標達成できるか、視覚で表現し理解させる。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が良かった点・努力点が言える。</li> <li>・今日のポイントがいくつかわかる。</li> </ul> 

図7 検証授業の実際

表5 作業所における豆乳作りの課題分析

豆乳作り	
番号	作業内容
1	前もって 水に浸し 膨らませた 大豆を 準備します。
2	大豆を すり器に 入れたあと、適量の 水を 流しながら スイッチを 入れます。
5	遠心分離器にて おからと 豆腐に 分離中。
7	豆乳を 鍋に 移したあと、ひと煮立ちします。その間、泡が 発生しますので 素早く 取り除いてください。
8	ひと煮立ちしたのを確認したらおいしいできたての豆乳が完成！

\*何か困ったことがあったら、手をあげて上司に相談しましょう。  
\*仲間と協力して、おこないましょう。

表5は産業現場等における実習で、作業所に実習することになった豆乳作りの課題分析表である。対象生徒aが実際の就労現場においても報告・連絡・相談の定着が図れるように作業学習、進路指導、企業等と連携を行った。作業中の騒音に備え、質問や相談等は「手をあげる」という文章を挿入した。それにより、報告や相談ができるようになるのではないかと考えた。

4 仮説の検証（検証の観点）

- (1) 一人でできる状況作りのための課題分析を作成できたか。
- ① 作業手順表にOKシールを貼ることで、作業手順表を使い、自ら次の作業に移行することができた。生徒によっては、戸惑う場面がみられたので、2回目の検証においては、個に応じた形で作業工程表をひらがなで作成し、読みやすくした。それによりスムーズに作業が遂行できた。
  - ② より生徒に合った手順の課題分析表を個別に作成する必要がある。
- (2) 課題分析を使うことで、報告・連絡・相談ができたか（表6-1・2・3）。
- ① 作業手順表の中にある「報告をする」という作業内容の所で報告することができた。初めて相談をする生徒がいた。
  - ② これまでは0から1回程度報告をしていた生徒が、手順表に従い2回以上報告することができた。
- (3) チェック表を使い、評価の変更を設定することで作業態度や作業遂行力が高まったか。
- ① グループ清掃で相互評価をする際、分担区域を生徒同士がはっきりわかるような指示が必要である。
  - ② 生徒がわかりやすい評価の基準を設けることで一人でチェックをすることができた。また、図8-1・2・3から、作業の正確性（ゴミの掃き残しとモップの拭き残し）が減り、ポイントが上がった。
  - ③ 1回目は自己評価のため、ゴミの掃き残し等チェックの箇所が多かったが、2回目以降は生徒同士で相互評価を行ったことで慎重になり、ポイントが高くなった。
  - ④ 場所が変わっても、作業の正確性や報告を意識して取り組んでいるためポイント数が高くなった。

表6-1 生徒aの清掃チェック表

清掃場所	男子トイレ	多目的ホール	男子トイレ
ほうき	◎	◎	◎
モップ	◎	◎	◎
報告・連絡・相談	○	○	◎
ポイントの合計	50	50	60

表6-2 生徒bの清掃チェック表

清掃場所	多目的ホール	男子トイレ	多目的ホール	男子トイレ
ほうき	△	○	○	◎
モップ	△	○	○	◎
報告・連絡・相談	◎	◎	◎	◎
ポイントの合計	30	40	40	60

表6-3 生徒cの清掃チェック表

清掃場所	多目的ホール	職員室	多目的ホール	職員室
ほうき	△	△	◎	◎
モップ	△	◎	◎	◎
報告・連絡・相談	◎	◎	◎	◎
ポイントの合計	30	45	60	60

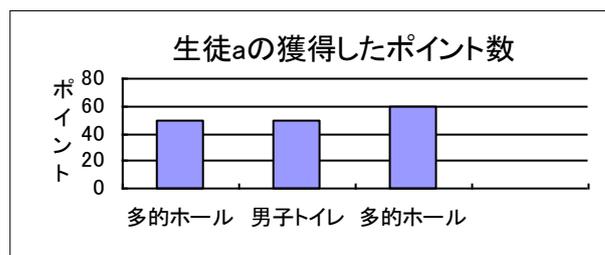


図8-1 生徒aの獲得したポイント

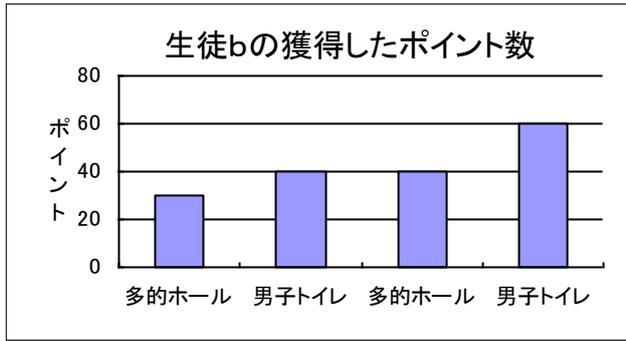


図8-2 生徒bの獲得したポイント

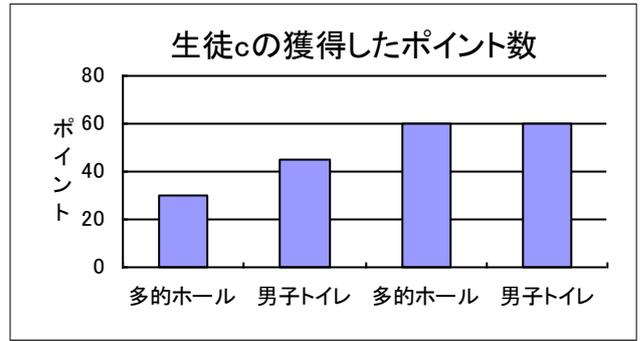


図8-3 生徒cの獲得したポイント

(4) 相互評価をすることで、作業態度を意識して取り組むことができたか。

清掃が終了した後、報告します。

6月

お客様や同僚に対して自分から挨拶します。

7月

適切な声の大きさで、「終わりました」と報告します。

6月

お客様や同僚に対して言葉の最後に「～です」「～ます」をつけて話します。

7月

清掃が終了した後、報告します。

6月

20m離れても聞こえる声の大きさで報告します。

7月

図9 作業学習における個人目標

① 図9は生徒a・b・cの作業学習における5月と7月の個人目標を比較したものである。5月の目標設定においては、教師から示された課題に対し作成されたものであった。そのため、個々の課題として受け止め、目標を達成しようという意欲につながっていなかったことが考えられる。この図から6月と7月の個人目標がそれぞれ異なっていることがわかる。3人とも6月の個人目標が達成したので、7月から新たな個人目標を設定することができた。

② 7月の目標は、生徒の作業評価を意識していることが理解できる。これは、目標が具体的に示せるようになってきた。例えば誰に、どれくらい、誰が、どのようにするなど記載が多くなっている。このことは、生徒が評価基準や作業の遂行性や正確性を意識して取り組むことができるようになったのだと考えられる。

③ 評価基準の設定、生徒相互で行う評価の工夫をすることで、働くために必要な能力を高めることにつながり、作業学習の達成感や成就感を得ることができたのではないかと考える。

## (5) 考察

3人の実態から得られた課題の改善に向けて、作業手順表の内容に「報告」を取り入れるための課題分析を活用した作業手順表の作成を行った。その結果、一人でできる状況作りを設定することが可能となり、報告が指示なしでできるようになった。これは、報告のポイント数がどの対象生徒も上がったことからわかる。つまり、これまでは作業のどの段階において報告を行うか戸惑っていた生徒が、課題分析を活用した作業手順表によりどのタイミングで報告を行い、作業を進めていくべきかを理解したためだと推察される。また、生徒がわかるようにシールやマグネットを活用したことも、報告のポイント数を高くしたのではないかと考えられる。これらのことから、実態に応じた課題分析を活用した手順表は、作業学習において働く上で必要な作業能力を高める指導として効果があるのではないかと考えられる。しかし、生徒個々が一人で作業ができる状況作りを設定していくためには、個々の課題や実態を分析し、個に合った作業手順表の作成が必要であると考えられる。

次に、きれいに清掃を行わないといけないという責任感と正確さを意識付けさせるため、わかりやすい評価基準の設定を行った結果、生徒が一人で作業の正確性を意識したチェックができるようになった。このことは、どの生徒も獲得したポイント数が回を重ねるごとに増加したことからもうかがえる。特に、2回目以降は生徒がお互同士でチェックをする相互評価に取り入れたことで、ゴミの掃き残しや拭き残しを意識して作業できるようになったのではないかと考えられる。さらに、チェックの視点においても、生徒が理解できるようになったことで、作業の正確性や遂行性につながったのではないかと考えられる。また、作業態度においても、生徒個々が具体的な目標設定を自らできるようになったことから意識して作業に取り組むようになってきたのではないかと考える。しかし今回は、設定した評価基準が厳密ではないこと、相互評価をする上でのコミュニケーションへの指導への不十分さから、企業が求める厳しさを適応力に関する指導においては、工夫改善の余地があると考えられる。

## IV まとめと今後の課題

作業学習における働く上で必要な作業能力を高める工夫として「課題分析」「作業評価の工夫改善」を行ったところ、以下の成果と課題が挙げられた。

### 1 成果

- (1) 課題分析を活用した作業手順表を作成することで、働く上で必要な作業能力を高めることができた。
  - ① 報告が確実に言えるようになった。
  - ② できる状況作りをするための課題分析を活用した作業手順表により、一人で最後まで作業ができるようになった。
  - ③ 時間を意識して、時間内に作業を終えることができるようになった。
- (2) 作業遂行力を意識した評価の工夫（相互評価や評価基準）をすることができた。
  - ① 作業の正確性が高まってきた。
  - ② 生徒自らが課題や目標を意識して取り組むことができるようになった。

### 2 課題

- (1) 一人でできる状況づくりをするために、課題分析を活かした個々の作業手順表の作成
- (2) 作業能力を高めるための評価の改善
- (3) 生徒の目標や評価を共通確認する場の設定の工夫

### 〈主な参考文献〉

- 梅永 雄二 2009 『夢をかなえる！特別支援学校の進路学習』 明治図書  
新井 英靖・茨城大学教育学部付属特別支援学校編著 2009『障害児の職業教育と作業学習』 黎明書房  
新潟大学教育人間科学部付属養護学校 2006 『「自立につながる力」を育てる教育システム』 明治図書

